

小澤征爾やアバドとの出会い

新型コロナウイルスの感染防止措置が世界的に刻一刻と変わっていくなか、3月に小澤征爾音楽特別公演で再来日する準備を整えて、楽しみに待っていたデイエゴ・マテウスだったが、日本の防疫強化措置強化を受けてキャンセルとなつてしまった。「3年前から準備して、この期間のスケジュールも空けておいたのに」と残念がる彼を慰めようと、「出国前72時間以内に検査を受けなければならぬし、日本人国後3日間は検疫所長の指定する宿泊施設で待機して、再検査しなければならぬから」とマイナス面を並べてみたが、「小澤さんのためならなんでもする！彼は僕にとって特別な人だから」と、その出会いを回想することからインタビューは始まった。

「初めて会ったのは、シモン・ポリバル・ユース・オーケストラ・オブ・ベネズエラのツアーで来日したときでした(20

08年)。そのときはもちろん直接話すことはできませんでしたが、なにか、ピンと来たような特別な感覚をおぼえました。その後、クラウディオ・アバドの紹介でサイトウ・キネン・オーケストラに招かれてから(2012年)、特別な関係だと感じています。この楽団とはずっ

といつしよに音楽を追求し、夕飯も共にしながら、友情を築けていると思えます」

——サイトウ・キネン・オーケストラとアバドのルツェルン祝祭管弦楽団は構造が似ていますよね。

「その通り。クラウディオ(アバド)



シモン・ポリバル・オーケストラを指揮するマテウス

についてルツェルンに行き始めたのは、彼が初めてマーラーを振つた年(2009年)、そのままの感覚で場所が日本に変わっただけのような錯覚を覚えました。クラウディオとの出会いも、小澤さんと似たような特別なものでした。1997年ごろ、グスタフ・マーラー・ユージェント・オーケストラのツアーでクラウディオがベネズエラに来て、その後、シモン・ポリバル・オーケストラのコンサートマスターとして、彼とツアーで共に旅をしました。モーツァルト管弦楽団(アバドが2008年に創設)にも、最初はヴァイオリニストとして招待してくれたのです。そのうち僕が指揮も勉強していることを知って、アシスタントとしていつしよに仕事をして、2009年には同管の首席客演指揮者に推してくれたのです。そうこうするうち、ヴァイオリンと指揮の両方を勉強するのは無理になり、指揮者の活動に専念することになりました。彼は寛大で、知的好奇心が旺盛です。音楽への愛情のために、新しい発見を得ようとする野心にあふれていました。敬意に満ちた友情を培い、重要な助言をくれました。いちばん印象に残っているのは、「どうやってそんなに多くの曲を暗譜できるのか」と質問したときのことです。「暗譜しないと、その曲を本当に知っていることにはならない気がするから」という答えだったので、いまでもなるべくすべて暗譜で振れるように、今日も勉強しています(と、スコアを見せる)」

Interview[®]
with

Matheus, Diego

デイエゴ・マテウス
エル・システマ出身のライジング・スター

取材・文 中東生
Text Shinobu Naka

エル・システマの体験

——そんな出会いもエル・システマが出发点ですね。エル・システマでの体験を話してください。

「エル・システマが世界的キャリアにつながった、いちばん良い時代にかかわれて幸運でした。エル・システマは大家族のようなもので、全員がなにかしら役割を担わなければならないのです。そしてそれを通して、音楽家としてだけでなく、人間としての成長を促します。12歳でコンサートマスターを任されたりします。それでもそのうしろから後輩が迫ってくるので、その地位を死守し、ふさわしい自分であると思う責任感が生まれます。僕の場合は、父が音楽好きで良い耳を持っていたので、6歳のころに児童合唱団に入れてくれました。そこで「エル・システマ」というものがあるから」と入試を勧められて、7〜8歳で音楽院に入学しました。ここではすべての楽器を試させてくれるので、僕はチェロが気に入って借りたのですが、父の車は小さくて、妹も二人いるので、車に入らないのです。そのうち、「どうせ同じようなものだから、小さいヴァイオリンにしないか」と言つて、中国人の店でヴァイオリンを買ってくれたのです！それからヴァイオリンが大好きになりました。エル・システマで成長したので、16歳からカラカスで一人暮らしを始めました。最初の数カ月はお金もなかったけれど、そのうち奨学金を勝ち取りました」

——貴方のチャイコフスキーは特別に感じるのですが、思い入れがありますか。

「もちろんエル・システマの創設者、ホセ・アントニオ・アブレウがチャイコフスキーに傾倒していたので、その音楽的な血を受け継いでいるとは思いますが。自分としては、チャイコフスキーを振るとき、とても自然な気持ちになります。それが伝わるのかもしれませんがね」

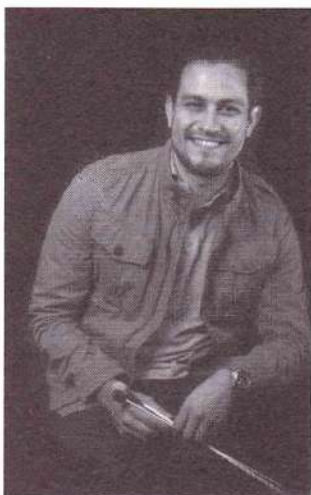
ベネズエラにつくしたい

——これから叶えたい夢はありますか。

「音楽を演奏すること。そう、すでに夢は僕の日常になっているので、それを続けることです。日本に行かなくなりました。次の仕事は4月にフランスのラジオでの演奏になります。夏にはアレーナ・ディ・ヴェローナ音楽祭のヴェルディ《アイーダ》もあるので、上演できる状況になることを祈るばかりです。そして日本に戻ることです。日本はシモン・ボリバル・オーケストラとのツアーで2回、サイトウ・キネン・オーケストラのほかにもNHK交響楽団にも何度も招かれています。その他、読売日本交響楽団や、兵庫のニューイヤークンサートにも招待されました。とくに天ぷら、焼肉など食べ物が好きです。松本にはお気に入り、小さな伝統的なお寿司屋さん、「みや寿し」があります。以前、日本に妻を連れて行ったとき、仕事のあとにしばらく滞在して、妻に日本を見せてあげたことがあり、妻も気に入ってくれました。今日がちょうど6年目の結婚記念日なので、妻はエル・システマのために働いていて知り合い、4年の交際期間を経て結婚しました。3歳と1歳の娘も生まれ、コロナ禍のキャンセル続きの仕事の代わりに、彼女たちと過ごせる時間があるのが唯一の救いです。エル・システマの大使としては、ベネズエラにひんばんに帰って国のためにつくしたいです。コロナ禍や政局の変動などで、もう1年以上帰っていないので……」



サイトウ・キネン・オーケストラやN響を指揮したこともあるマテウスは、日本に「戻る」のも夢だという



ディエゴ・マテウス
1984年生まれ、ベネズエラ、パルクシメト出身。エル・システマでヴァイオリンを学び、シモン・ボリバル・オーケストラのコンサートマスターを務めながら、ホセ・アントニオ・アブレウに指揮を学ぶ。2006年からアバドとベネズエラやイタリアを回り、2009年モーツァルト管首席客演指揮者に就任。2011年から2015年までフェニーチェ歌劇場の、2013年から2016年までメルボルン交響楽団の首席指揮者を務めた。